

令和 2 年 9 月 13 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04761

研究課題名（和文）多文化共生に資するコンピテンシー育成に向けた身体表現活動の音楽科授業デザイン

研究課題名（英文）Music Curriculum Design for Bodily Expression Activities Aiming to Foster Competencies Beneficial for Multicultural Coexistence

研究代表者

桐原 礼（KIRIHARA, Aya）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：10555311

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、多文化共生に資するコンピテンシーを効果的に育成していくために、身体表現活動を導入した音楽科授業デザインのあり方について明らかにすることを目的とした。

その結果、活動内容・評価・コンピテンシーを一体化させた授業デザインにおいて、各スタンダードに応じた身体表現活動が位置づけられ、その活動内容に適合し得るコンピテンシーが関連づけられていることを確認した。また音楽的な側面のみならず、コンピテンシー・ベースで各児童の評価をしていることが示された。こうした授業デザインの方法においては、育成すべきコンピテンシーを明確にしなが、活動内容を厳選していくことができることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、我が国の学校の多文化化が進行しており、今後、各教科等の授業時においても外国にルーツを持つ子どもへの対応が求められると考える。また、コンピテンシー育成に向けた授業デザインは世界的な潮流となっており、我が国の音楽科教育においても、育成すべき資質・能力を明確にしていくことが求められている。

本研究においては、スペインにおける先駆的な事例検討を通して、音楽科身体表現活動が多文化共生に資するコンピテンシー育成に寄与していることを示すことができた。また、本研究で明らかにしてきた授業デザインの方法は、我が国の音楽科教育をはじめ、他教科等においても活用できると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to identify a desirable music curriculum design incorporating bodily expression activities as a tool to effectively foster competencies beneficial for multicultural coexistence. For this purpose, it selected the practices of primary music education in Spain as the research subject.

The research findings identified that, in the music curriculum design where activities, evaluation, and competencies are integrated, different bodily expression activities corresponded with different standards, and different competencies were associated with matching activities. The study also found how each child is evaluated not only based on musical aspects but also on competency aspects. The findings demonstrated the ability of such curriculum design to clarify desirable competencies and handpick activities corresponding to such competencies.

研究分野：音楽教育学

キーワード：初等音楽科 コンピテンシー 身体表現 多文化共生 授業デザイン スペイン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象としたスペインは多文化化の著しい進捗がみられ、2015年1月時点のスペインの人口における移民の割合は9.6%であり、児童生徒数における移民の割合は8.5%にまで達している。こうした学校の多文化化に伴い、様々な多文化共生策を推進してきている。また2006年の教育基本法(LOE法)よりコンピテンシーの概念の導入し、すべての教科において7つの基礎コンピテンシーの伸長に関連づけて学習をすすめることが求められている。また、初等音楽科の領域は、「鑑賞」(Escucha)および「音楽演奏」(La interpretación musical)で構成されていたが、教育改善基本法(通称LOMCE法、2013年)より「音楽における動きとダンス」(La música, el movimiento y la danza)が新たな領域として位置づけられたという特徴がある。

これまでの筆者のスペインの初等音楽科授業を対象とした研究において、多文化共生に特に関わりが深いコンピテンシーは、「社会性・市民性」コンピテンシー、「文化的認識および表現」コンピテンシーであることを確認してきた。また音楽科授業にて多文化共生を推進していくために、身体表現活動が有効に働く可能性があることが示唆された。

今日、我が国においても学校の多文化化が進行しており、外国にルーツを持つ子どもへの対応に迫られている。また、コンピテンシー育成に向けた授業デザインは世界的な潮流となっており、我が国の音楽科教育においても、育成すべき資質・能力を明確にしていくことが求められている。

そこで本研究においては、スペインの先駆的な取り組みについて取り上げ、コンピテンシー育成の視点から多文化共生に資する身体表現活動のあり方について検討し、我が国の音楽科教育への示唆を得ることを着想した。

2. 研究の目的

スペインの初等音楽科教育について検討し、多文化共生に関わるコンピテンシー育成に向けた身体表現活動の音楽科授業デザインのあり方について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

スペインの初等音楽科カリキュラムおよび、公立小学校音楽科教員作成の年間指導計画書の分析を通して、コンピテンシー育成に向けた身体表現活動の内容および評価のあり方について検討した。

また身体表現教材や身体表現活動について、スペインの大学音楽科教員の取り組みを取り上げ、多文化共生に資するコンピテンシー育成に向けた活動の特徴について検討した。

4. 研究成果

(1)コンピテンシー育成に向けた身体表現活動の授業デザイン

初等音楽科年間指導書にみる評価のあり方に関する検討

教育改善基本法(通称LOMCE法、2013年)下のカリキュラムにおいて、新たに初等音楽科教育の領域に「動きとダンス」が位置づけられた。また従来の評価は「評価規準」(criterios de evaluación)のみであったが、LOMCE法下のカリキュラムより、新たに「学びのスタンダード」(Estándares de aprendizaje evaluables)が設けられた。これは、実際に児童を評価するための項目であり、各教員がコンピテンシーとの関連づけを行うこととなっていることを確認した。

実際の授業デザインの事例を検討するために、ムルシア州初等音楽科教員が作成した「音楽科指導計画書」(Programación Docente, Música)の2016-2017年用6学年分の分析を行ったところ、「文化的認識および表現」コンピテンシーはすべての学年において最も重要視されており、次に「社会性・市民性」コンピテンシーが位置づけられていることが明らかになった。また「動きとダンス」領域における「社会性・市民性」および「文化的な認識・文化的表現」コンピテンシーの特徴について検討したところ、「共に合わせる・共に創り出す(協働)」「対話や表現のツールとしての身体の動き・感情の認識」「音楽の特徴・伝統文化の認識(多様性・価値認識)」というキーワードが導き出された。

教員各自が年間指導計画書を作成する上で、どのような活動内容がどのスタンダード項目に結びつくのか、さらにいずれのコンピテンシー育成につながるのかを検討しながら、活動内容・評価・コンピテンシーを一体化させた授業デザインを実施していることを確認することができた。

「動きとダンス」領域の各スタンダードにおける身体表現活動の特徴

ムルシア州初等音楽科教員が作成した「音楽科指導計画書」の最新版(2017-2018年用)6学年分の分析を行い、「動きとダンス」領域の各スタンダードにおける身体表現活動の特徴について検討した。指導計画書に示されている各活動内容について、「聴取」「身振りや表情」「身体の動き」「振付」「協働」に分類した。

その結果、「動きとダンス」領域の各スタンダードにおける活動の特徴は以下のようであった。

- ・スタンダード1「身体が、感情や情緒、社会との相互作用の形式のための表現媒体であることを認識する」における活動の特徴:身振りや表情により、感情を表現する
- ・スタンダード2「教師の指示により、身体の様々な音色を表現する」(1年)、「ダンスを表現する際に音楽との関連やポーズをコントロールする」(2年~6年)における活動の特徴:聴くことを中心として、身体の動きを適合させる

・スタンダード3「音楽や友達と自身の動きを合わせてダンスに取り組む」(1年~3年)、「教室で実施するダンス音楽を聴いて認識する」(4年)、「様々な時代や地域のダンスについて知る」(5年)、「様々な地域や時代のダンスについて、芸術および文化の遺産であることを評価し再認識する」(6年)における活動の特徴：聴くことを中心として、ダンス表現をする・多様なダンス曲について知る

・スタンダード4「教室で実施するダンス音楽を聴いて認識する」(1年~3年)、「音楽に動きを合わせて簡単なダンスをする」(4年)、「文化的な伝承の重要性を理解しながら伝統的なダンスを表現する」(5年~6年)における活動の特徴：ダンス表現、伝統的なダンス表現

・スタンダード5「音楽作品に対応する振付を考案する」(5年~6年)における活動の特徴：振付の考案

こうした中で、5つのスタンダードは、発達段階に沿ったレベルで設定されており、それぞれに対応した身体表現活動が位置づけられていることを確認した。

身体表現活動における「社会性・市民性」コンピテンシーと「文化的認識および表現」コンピテンシーの要素に関する検討

2013年、2014年、2018年に日本のT大学およびS大学にて行われた、スペイン人2名(公立小学校音楽科教員、教員養成系大学の音楽科教員)による特別講義(主として初等音楽科を想定した身体表現活動)のビデオ録画データを分析の対象とした。19の各活動事例について、「社会性・市民性」(CSC)および「文化的認識・文化的表現」(CEC)のコンピテンシーの要素を挙げた。

その結果、身体表現活動の事例において、「自主性(自発性)のもとに参加・協力する：CSC・CEC」ことは、すべての事例において共通していた。これは、実技を伴う活動において最も基本的な事項であり、「表現を理解し価値を認める：CEC」ことに直結していくと考えられる。また例えば、個々の「創造性：CEC」が発揮されるような場面では、自身のアイデアや考えを「表明する：CSC」とともに、「他者の意見に傾聴する：CSC・CEC」機会ともなりうるため、「他者の視点を理解し相違する考えを受け入れる：CSC・CEC」ことにつなげていくような授業デザインが期待されていると考えられる。このように、「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーには共通した要素がみられたり、双方の要素が関わり合ったりしていることが示された。この際、「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーは、主として認知的・情意的な側面に関わりが深く、「社会性・市民性」のコンピテンシーは、特に行動面の変容を促すものであると考えられる。

こうした授業デザインにおいては、活動内容と共にコンピテンシーの具体的な要素に着目することができる。さらに、授業時の活動がどのような能力につながっていくのかを明確化しながら、より効果的に成果を上げられるよう、活動内容を焦点化するためにも有効であると考えられる。

(2)身体表現の活動内容の特徴

身体表現教材における多様性の認識と協働のあり方に関する検討

音楽教育における身体表現の教授学を専門としているスペインの研究者が作成したDVD教材「Percusión corporal en diferentes culturas」(全10巻)および「Bodymusic bodypercussion didáctica de la percusión corporal」(全5巻)を分析対象とした。これらにおいては、世界の様々な国および地域におけるボディー・パーカッションの説明とともに映像が収められているほか、音楽教育活動を展開するための具体的な指導法および実践例の映像、楽譜などが組み込まれている。

音楽文化の多様性の認識を促すための身体表現の特徴として、世界各地のリズムの特徴・手拍子の仕方・身体の動きなどが挙げられた。また協働を促すための活動の特徴として、ペア・円形・フリーなどの多様な活動形態を通して、子ども達の交流を促すことが示された。このような表現教材を鑑賞したり実際に体験してみたりすることによって、子ども達が多様性を受け入れるとともに、心理的な距離を縮めたり仲間意識を高めたりすることができる可能性が示唆された。

ボディー・パーカッション活動における学びに関する検討

ボディー・パーカッション活動の内容や効果について検討するために、2017年6月にS大学にて実施したスペイン人研究者による特別講義の内容を取り上げた。ここでは、講義形式の中に演習場面が多く設定され、参加学生はボディー・パーカッションの多様な活動を体験していた。参加後の学生の感想文を取り上げ、ボディー・パーカッション活動における学びについて検討した。

その結果、アフリカ音楽のコール・アンド・レスポンス形式による身体表現、サンバのリズムや楽器音を身体で表す活動などを通して、「異文化体験」や「音楽の多様性の認識」が促されたとの意見がみられた。また、様々なリズムに乗って握手や挨拶をしながらペアを交代していく活動においては、「他者との交流」の中で「相手の表情や気持ちを読み取ろうとする」ことが出来たとの意見がみられた。さらに、指示情報に反応して歌ったり動いたり手拍子をしたりする活動においては、「相手の言葉や表情を集中して見ようとする働き」があったと述べられていた。

ボディー・パーカッションは、世界の多様なリズムや身体の動きを体験できるものであり、音楽的な特徴の認識および音楽表現の高まりを促すことにもつながる。また他者との非言語コミュニケーションを推進したり、注意力を高めたりすることができる可能性が示唆された。

身体の動きを伴う音楽表現づくりにおける学びに関する検討

S大学教員養成系学部授業におけるボディー・パーカッション・アンサンブルの活動について取り上げ、学生の振り返りシートの内容を分析の対象とした。ここでは、身体の動きを取り入れた音楽的な表現の工夫に取り組む参加学生の心理的側面に着目し、他者と協働しながら身体表現を伴う表現づくりを行う中で、どのような学びを得ているのかについて検討した。

身体の動きを伴う音楽表現においては、楽曲の音楽的な表現の追究を基礎としながらも、協働によるアイディア出しや、他者に「見せる」「楽しませる」という視点が重要視されていることが示された。このような経験において、協働によって困難を乗り越える達成感を得たり、自身の表現や音楽への見方を拡大したりしていく可能性が見出された。

(3)まとめと今後の課題

本研究においては、多文化共生に資するコンピテンシーを効果的に育成していくために、身体表現活動をどのように実施していくことができるか、その授業デザインのあり方について明らかにすることを目的とした。

スペインの初等音楽科の活動内容・評価・コンピテンシーを一体化させた授業デザインにおいては、各スタンダードに応じた身体表現活動が位置づけられ、その活動内容に適合し得るコンピテンシーが関連づけられていた。この方法によって、どのようなコンピテンシーの育成を目指すのかを念頭に置きながら、授業デザインを構成できると考える。さらに、教員各自が各コンピテンシーの具体的な要素について認識を深めることにより、それぞれの児童について、音楽的な側面のみでの評価ではなく、コンピテンシー・ベースで評価をしていくことができると考えられる。

本研究においては、多文化共生の視点より、「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシー育成に向けた音楽科身体表現活動について検討したが、その他の5つのコンピテンシー育成に音楽科授業や身体表現活動がどのように寄与することができるかについても検討が必要である。また、実際に身体表現活動を指導しているスペイン人研究者などの活動事例に関する情報を得ることができたが、身体表現教授法について体系化していくことも重要であると考えられる。これらについては、今後の課題として取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 桐原 礼	4. 巻 vol.47 no.2
2. 論文標題 多文化状況下における児童間の関係性構築に向けた音楽教員の対応に関する考察 スペイン・ムルシア州におけるインタビュー調査を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桐原 礼	4. 巻 第66号
2. 論文標題 ボディー・パーカッションを中心とした身体表現活動における学びについて スペインの初等音楽科における取り組みより	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 溪声	6. 最初と最後の頁 56-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桐原 礼	4. 巻 18
2. 論文標題 身体の動きを伴った音楽表現づくりにおける学びについて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要 教育実践研究	6. 最初と最後の頁 119-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桐原 礼	4. 巻 14
2. 論文標題 身体表現活動を通して育まれる「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーについて スペインの初等音楽科授業デザインの検討を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 104-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 桐原 礼
2. 発表標題 身体表現活動を通じたコンピテンシー育成に関する考察
3. 学会等名 日本音楽教育学会第48回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 桐原 礼
2. 発表標題 身体表現による演出を伴った表現づくりについて
3. 学会等名 日本音楽教育学会北陸地区大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桐原 礼
2. 発表標題 スペインの初等音楽科における社会的・文化的コンピテンシー育成に関する考察 身体表現活動を中心として
3. 学会等名 日本学校音楽教育実践学会第23回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桐原 礼
2. 発表標題 スペインの初等音楽科における身体表現活動の授業デザイン 多文化共生に資するコンピテンシー育成の視点より
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桐原 礼
2. 発表標題 音楽科教育における多様性の認識と協働について スペインの身体表現教材の検討を通して
3. 学会等名 異文化間教育学会第40回全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 本多佐保美・中嶋俊夫・齊藤忠彦・桐原礼	4. 発行年 2018年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 199
3. 書名 小学校音楽科教育法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----